

交渉における挑発的コミュニケーション方略の特徴

夏 麗 方 府 國

1. 序

言語教育はコミュニケーション能力を抜きに語ることとはできない。たとえば語彙と文法が完全に理解できていても、コミュニケーション能力がなければ十分な言語能力を備えているとは言えないのである。例えば、相手が話している内容を十分に理解できるにもかかわらず、パーティーなど人が集まるところで、誰とも話ができないといったような人を考えてほしい。その人は語彙と文法を熟知しているのにも関わらず、他者と話ができない。この場合、この人の言語能力は高いと言えるのであろうか。あるいは、コーヒーを飲みたくなったときのことを想像してほしい。自分でコーヒーをいれることができれば問題はないが、何らかの理由で自分以外の誰かにコーヒーをいれてもらう場合、あなたはなんと言って相手にお願いするだろうか。ある人は「コーヒーをいれてくれませんか」と丁寧に言うかもしれない。だが、ある人は「コーヒーをいれてくれ」とぶっきらぼうに言うかもしれない。もし、コーヒーをいれてもらう相手が自分の働いている職場の部下であり、命令することが許される状況であれば、特に問題はない。ところが、たとえ部下であっても、仮に命令することが許されない状況（例えば、その部下があなたの上司の息子であるといった特別な状況が存在する場合）があれば、この言い方は誤っているとみなされる。したがって、これらのことからコミュニケーション能力を抜きに言語能力を論じることは不可能であり、自ずとコミュニケーション能力の育成が、言語教育において重要であるということが理解できるのである。

コミュニケーションの目的を達成するためには、言語を効果的に用いる

ことが必要である。例えば、先にあげた誰かにコーヒーをいれてもらう場合は、その目的はコーヒーをいれてもらうことであり、相手がコーヒーをいれてくれればそれでコミュニケーションは成立したといえる。しかし、そこに「相手の機嫌を損ねずに」という条件が加われば、その目的を達成するためにさらに適切な言葉を選択しなくてはならない。そうでなければコミュニケーションに支障が生じるからである。本稿が扱うテーマもこのようなコミュニケーション能力である。その中でも特に、交渉における方略の分析を試みた。

本稿がその分析の対象として用いたのは映画『ウェディング・シンガー』¹の一場面である。この場面では登場人物たちがあることをめぐり、互いに交渉を含めたコミュニケーションを行っているのである。その詳細については3.1.で説明をすることにする。

本稿の構成は次のようになっている。まず、2.1.では会話分析の概要をまとめた。これは本稿が多くの研究を基礎として成り立っていることを示すものである。そして、2.2.では映画の場面を分析する方法について述べた。分析には度量衡を用いたほうが便利であるし、これまでの研究から幾つかの度量衡が既に考案されている。次に、3.1.では本稿が用いる会話分析の対象となる映画の場面を要約し、3.2.でその分析を行った。最後に4.で分析の内容を検討し結論とした。

2. 先行文献研究

2.1. これまでの談話分析研究

2節からは本稿に関連するこれまでの会話分析の研究を概観する。まず、Harvey, Schegloff, Jefferson (1974) が“A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation”において、会話における話順 (turn taking) の特徴を分析した。その後、Sinclair and Coulthard (1975) がThe Sinclair-Coulthard model (以下 SCM) を考案した²。これは会話の度量衡を定義・分類したもので、後に広く用いられることになる。本稿で用いた単位ムーヴ (move) も SCM によって定義されたものである。SCM ではアクト (act) が談話の最小単位として扱われているのだが、Owen (1983) はムーヴを最小の単位とする考えを示した。更に、中田 (1990) が Owen の考えを採用した。ところが、1990年にOwenはその考

えを訂正し、SCM の談話単位を援用しアクトを最小の単位と認めた。その後、McCarthy (1996) が SCM を忠実に援用した *Discourse Analysis for Language Teachers* を出版した。こうして、一般的に SCM が談話分析の基本単位として広く認知されたのである。しかし、ムーヴとアクトの定義にはいまだ問題が残されたままになった。例えば、Tsui (1993) は SCM のムーヴとアクトを採用しているが、そこで用いられたムーヴとアクトの定義は、明らかに SCM の定義と異なっている。そこで、この問題を解決するために國府方 (2001) がムーヴとアクトの定義を試みた。しかし、その定義も不十分であったため國府方 (2003) で再定義を試みた。本稿ではその定義に基づいたムーヴを用いて会話の分析を行っている。そこで、2.2. でそのムーヴの定義を含む会話分析の度量衡について解説する。

2.2. ムーヴとアタランス

本稿では会話分析の度量衡として主にムーヴを用いている。しかし、ムーヴについての説明をする前に、アタランス (utterance) とイクスチェインジ (exchange) の定義を見る必要がある。それはアタランスがムーヴによって構成されているからである。Sinclair and Coulthard (1992) では次のようにアタランスとイクスチェインジの概念を定義している。

定義 I: アタランスとイクスチェインジ

Initially we felt the need for only two ranks, utterance and exchange; utterance was defined as everything said by one speaker before another began to speak, and exchange as two or more utterances. (2)

これに従うと、X が Y に話しかけてから、話順が Y に移行する間、つまり、Y が話し始めるまでに X が発話した全てがアタランス³ ということになるのである。そして、こうしたアタランスの集まりをイクスチェインジと定義しているのである。

最も重要なことはこのアタランスの性質がムーヴによって決定付けられるということである。それはアタランスがムーヴによって構成されるからである。また、アタランスにいくつのムーヴが存在するかは決まっていない。つまり、発話者は相手と会話をしながら必要なムーヴを追加していくのである。したがって、ムーヴは 1 つの場合もあるし、複数になることも

ある。

そこで、ここからはムーヴの定義について概観していく。また、本稿の末尾にある「添付資料（スクリプト）」はこのムーヴと呼ばれる度量衡を基準としている。

定義 II：ムーヴの境界

「ムーヴ」の境界は統語の単位である単文と複文に一致する⁴。

國府方 (2003) では、上記のようにムーヴを定義した。例えば、“She knew what she wanted, but she never told anyone.” というアタランスを考えて欲しい。このアタランスは “She knew what she wanted.” と “She never told anyone.” の 2 つの単文が接続詞 “but” によって結合され 1 つの重文になったものである。つまり、“She knew what she wanted, but she never told anyone.” はこれで 1 つのアタランスであるが、ここには 2 つの単文の存在を認めることができるのである。そして、定義 II から単文はムーヴの境界と一致するから、ここには 2 つのムーヴの存在を認めることができるのである。要するに、“She knew what she wanted, but she never told anyone.” というアタランスは “She knew what she wanted.” と “but she never told anyone.” の 2 つのムーヴで構成されているのである。本稿では以上のように定義された、会話分析の度量衡である、アタランスとムーヴを用いて場面の分析を行う。

また、ムーヴの種類であるが、これについては次の定義を当てはめることができる。

定義 III：ムーヴとアクト

ムーヴの機能はそのムーヴの中で主要な働きをするアクトの機能に準じる。

これを理解する前に、まず、ムーヴの構成要素がアクトであるという前提を確認しなくてはならない。ちょうどセンテンスがパラグラフの構成要素であるのと同様にアクトもムーヴの構成要素なのである。そして、トピック・センテンスがそのパラグラフの性質を決定するのと同様に、主要なアクトの機能がそのムーヴの機能を決定するのである。したがって、そこ

から上記の定義」が導き出されるのである。

さて、そこで問題となるのがアクトの機能である。実はこのアクトの機能の分類は未だに不完全なのである。一応は Sinclair and Coulthard (1992) がその分類をまとめているが、それは学校の授業で教師と生徒が用いる機能にのみ限定されているという問題点がある。したがって、アクトの機能の分類にはまだ議論の余地が残されているとみなされる。しかし、この分類はけしていい加減なものではないから、本稿も基本的にはこの分類に従い、必要に応じて修正を加えるという立場をとる。

そこで、具体的に Sinclair and Coulthard (1992) が定義した 22 種類のアクトの分類をあげておく。すなわち、その 22 種類とは、目印 (marker), 開始合図 (starter), 言語応答 (reply), 無言強勢 (silent stress), 余談 (aside), 問いかけ (elicitation), 確認 (check), 命令 (directive), 教示 (informative), 促進 (prompt), 発話意思表示 (bid), 指名 (nomination), 理解意思表示 (acknowledge), 意見陳述 (comment), 了解 (accept), 評価 (evaluate), 聞き返し (loop), 手がかり (clue), 意見要求 (cue), メタ陳述 (metastatement), 再要約 (conclusion), 動作反応 (react) の 22 種類である⁵。先に述べたように原則として本稿はこの分類を分析に用いることとする。

3. 場面分析

3.1. 場面の概要

分析に用いる場面の概要を説明しておく。この場面に登場するのはホリー (Holly), ジュリア (Julia), ロビー (Robbie) の 3 人である。そして、この場面はホリーとジュリアが、結婚式にする「誓いのキス」について、お互いの意見を述べ合っているところから始まる。ここで「誓いのキス」が話題となったのは、ジュリアには婚約者がおり、彼女がじきに式を挙げることになっていたからである。そして、その「誓いのキス」を巡って、ホリーとジュリアの意見が対立する⁶。その時、ジュリアがチャーチ・タング (church tongue) という言葉を口にするのだが、ホリーにはそれが何かさっぱり理解できない。そこで、ホリーはジュリアにそれがどういうものか説明するように要求する。つまり、ここからホリーのジュリアに対する交渉が始まるのである。ところが、ジュリアはそれを言葉では説明できないと言う。そんな時、偶然にロビーが 2 人のところへ現れる。そこでホリ

ーはジュリアにロビーを相手に、チャーチ・タングを実演するように要求をするのである。

この場面で着目すべき点は、ホリーがいかなる方略を用いて、コミュニケーションを成立させるかというところにある。もちろん、交渉人の目的は被交渉人のジュリアとロビーに、チャーチ・タングを実演させることである。当然のことであるが、ジュリアとロビーにキスを実演させることができなければ、ホリーの交渉は失敗したことになる。

また、ここでホリーが用いた方略は、極めて複雑なものである。なぜなら、そこに用いられるアタランスは、単純な文理解釈⁷をするだけでは、その本来の意味を理解することができないからである。したがって、このアタランスの真の意味は、拡大解釈⁸をしないと理解できないような構造になっているのである。

以上が本稿の分析に用いられる場面の概略である。以下からは実際にその場面の、最も重要な部分に焦点を当てて会話分析を行い、コミュニケーション方略の特質について論じていく。

3.2. 場面分析

まず、チャーチ・タングについて議論をしているうちに、ホリーがジュリアに、チャーチ・タングを実際にやって見せるように要求する。しかし、ジュリアとロビーはなかなかキスをしようとししない。そこで、ホリーは“*We’re all adults here (28⁹).*”と述べる。

2.2. であげた 22 種類のアクトの分類に従うと、このムーヴには 2 つの機能が該当することになる。すなわち、促進と教示の機能である。例えば、ホリーがキスをしようとししない 2 人に対して、キスを促進させる目的でこのムーヴを使ったのなら、このムーヴの機能は促進であるといえる。しかし、2 人に「自分たちは大人である」という事実を教示する目的でこのムーヴを用いたのであれば、このムーヴの機能は教示であるといえる。しかし、この場合は、その両方の目的を同時に果たしているとみなすことができる。したがって、このムーヴには 2 つの機能が共有されていることとなるのである。このように、1 つのムーヴに複数の機能が共存することは、決して珍しいことではない。

ここでさらに問題となるのは、ここで用いられている教示の機能を、単純に教示とみなしてよいかという点である。実は Sinclair and Coulthard

(1992) が定義した教示の機能は、情報を提供するものであり、それ以外の定義は与えられていないのである。しかし、ホリーが用いたムーヴは、決して情報を提供する目的だけのものではないし、そこに促進の機能を補ったとしても、まだ不十分であるといわざるを得ないのである。

つまり、そこには教示や促進とは別の、もっと重要な機能が隠されている可能性があるのである。実は、それこそが本稿のテーマとなっている、挑発の機能なのである。挑発とは、相手を刺激して、向こうから事を起こすようにしむけることである。そして、重要なことは、どのようにして相手を刺激するかということである。

これについての本稿の見解は、以下のとおりである。一般的に大人は、子ども扱いされることを嫌う傾向にあるから、ホリーもこのムーヴがジュリアとロビーに対して、挑発しうるものであると判断したのである。事実、子供扱いされるということは、成人として、あらゆる面で未熟であると判断されることになる。そして、そのことで多くの不利益を被る恐れがあるのである。例えば、子供は飲酒・喫煙が禁止されているし、年齢制限を設けられ（レストランや映画館などで）、その自由が制限されるといったようなことがある。これらの現実を考えてみても、成人が子ども扱いをされることを嫌う理由がわかる。したがって、ホリーもジュリアとロビーが子供扱いをされて馬鹿にされれば、心理的抵抗を感じるであろうことを、当然の結果として予測していたとみなすことができるのである。つまり、ホリーはジュリアとロビーのプライドを脅かすことで相手を動かし自己の目的を果たそうとしたのである。この被交渉人のプライドに働きかけて交渉を有利に進めようという方略はコミュニケーション方略全体から見て大変特徴的なものである。

また、挑発をめぐっては、挑発と説得の違いが問題となる。というのも挑発も説得の範疇に含まれるのではないだろうかという疑問があるからである。しかし、結論として、挑発と説得は明らかに異なるものである。確かに、どちらも自発的に相手に何かをさせるという点で共通はしている。しかし、挑発を構成する要件は、被交渉人に何らかの心理的圧迫を与えることで、交渉人が予測した結果を導き出させるものであるのに対し、説得は心理的圧迫を与えずに、交渉人が期待した結果を導き出すという点で異なっている。これは脅迫が説得の範疇に含まれるかどうかを考察すれば理解できることである。つまり、脅迫はあくまで脅しであり、被交渉人はけし

て納得して交渉人の要求に応じるわけではないのである。一方、説得の場合は被交渉人が納得をして相手の要求に応じるのである。したがって、この心理的圧迫と納得の有無から生じる因果関係を考えてみても、挑発、脅迫、説得はそれぞれ異なるものであることが分かる。つまり、挑発の要件は心理的圧迫と納得の両方であり、脅迫の要件は心理的圧迫だけで、納得を得る必要がない。一方、説得の要件は脅迫とは逆に、その要件は納得を得ることだけで、心理的圧迫は含まれないのである。

しかしながら、ホリーの挑発の効果もむなしく、この後ジュリアとロビーはキスをしなかった。そして、その後に短いポーズが続く (29) のである。この短いポーズも、ムーヴとしてその機能を果たす。つまり、このムーヴには動作反応の機能があるとみなすことができるのである。これはこのムーヴを構成している唯一のアクトに、動作反応の機能があるとみなされるためである。当然のことながら、これはホリーの挑発には応じないという意味を、ジュリアとロビーが表したムーヴである。さて、ジュリアとロビーはホリーに “We’re all adults here (28).” と言われても、キスをしようとせず、しばらくお互いを見つめ合っていた。そこでホリーは “I’m gonna have to see it for making an educated decision (29).” と述べる。

このムーヴは 2 つのアクトに分類することができる。すなわち、 “I’m gonna have to see it.” と “for making an educated decision.” の 2 つである。この場合の前者は教示のアクトであるが、後者は Sinclair and Coulthard (1992) の分類には適切なものがない。そこで國府方 (2003) の詳細化の機能をここでは援用することにする。詳細化の機能とは、主要なアクトに従属するもので、その主要なアクトに追加情報を加え、その内容をより詳細に教示する機能がある。当然のことながら教示の機能とは、アクトの従属性の性質から異なるとみなされる。したがって、このムーヴは教示のアクトと詳細化のアクトで構成されているのだが、詳細化のアクトは教示のアクトに従属しているものとみなされるので、このムーヴの機能は教示であるとみなされる。

次に、コミュニケーション方略の観点から、このムーヴ “I’m gonna have to see it for making an educated decision (29).” を分析をする。ここで注意すべき点はこのムーヴがその前の “We’re all adults here (28).” を踏まえた発言となっていることである。つまり、挑発のムーヴがうまく機能しなかったため、それを補う目的で教示のムーヴを使用したのである。つま

り、ホリーはムーヴ “We’re all adults here (28).” では交渉がうまく行かないと判断し、新たな交渉の方略としてムーヴ “I’m gonna have to see it for making an educated decision (29).” を持ち出したのである。先に論じた脅迫、挑発、説得の分類に従うと、このムーヴには心理的圧迫の存在が認められず、ジュリアとロビーは納得してキスをしているとみなされるため、これを説得に分類することができる。したがって、ムーヴ “I’m gonna have to see it for making an educated decision (29).” はその前のムーヴ “We’re all adults here (28).” を補う説得のための教示の機能が備わっているとみなされるのである。

このムーヴを受け、ジュリアは “Well, if it’s for educational purposes (30)” と言ってロビーと遂にキスをする。つまり、ホリーはこの時点でその目的を達成したのである。

4. 結論

本稿では映画『ウェディング・シンガー』の一場面を分析対象とし、交渉に用いられる、挑発的コミュニケーション方略の特徴を分析してきた。それをまとめると以下ようになる。挑発は脅迫や説得とは異なるものであるのだが、それらは共に交渉においてその目的を効果的に達成しうる手段として用いられる。そして、挑発的コミュニケーション方略は、人間のプライドに対して心理的圧迫を与えるという点で特徴的なものである。

交渉には説得か脅迫が用いられることが一般的で、挑発が用いられるというケースはあまり多くない。したがって、挑発が交渉の手段の 1 つとして認められたことは重要なことである。おそらく、学校の英語教育ではほとんど教えられないことのないコミュニケーション方略であろう。その理由は、この方略の運用が極めて困難なことにある。なぜなら、使い方を誤ることで思わぬ結果を招く危険性があるからである。つまり、相手が挑発に乗らなければ、自己の目的を達成することができないばかりか、交渉相手に対して悪い印象を与え、その後の交渉に障害をもたらすこともありうるからである。

しかし、この挑発的コミュニケーション方略が、コミュニケーションで果たす役割は重要なものであるように思う。それは日常的にこうした方略が用いられるケースが頻繁にあるからである。もちろん、それが絶対的に

交渉を有利に進めるというものではない。その効果はその時々条件によって変化するのである。本稿の分析でも、最終的に目的を達成させた方略は挑発ではなく説得であった。しかし、だからといって説得を用いたら、必ずその交渉が成立するというものでもないのである。

以上、本稿では挑発的方略の特徴を述べてきたが、会話分析からコミュニケーション方略の体系を確立するという試みはまだ発展途上にある。事実、会話分析の方法は多岐にわたり、その体系が未だに統一されていないというのが現実である。しかし、逆にこの分野にはまだ開拓すべき研究の場が多く残されているといえるのである。

添付資料 (スクリプト)

- 00 Holly : Hey, wait, wait a second.
- 01 Maybe, maybe he can help us.
- 02 You're the expert.
- 03 We're debating about wedding kisses.
- 04 I say that is okay for it to be an open mouth kiss.
- 05 Julia : I say that is type of an occasion where people
 dressup, so it's not appropriate.
- 06 Robbie : I see.
- 07 Holly : What do you want to do ?
- 08 I mean, thin, tight mouth and it's over ?
- 09 Julia : Thin, partially opened, no tongues, over.
- 10 Holly : No tongues, please.
- 11 There must be a little tongue.
- 12 Julia : Well maybe a little tongue.
- 13 Not porno tongue.
- 14 Church tongue.
- 15 Robbie : Church tongue.
- 16 I like that.
- 17 Holly : Church tongue ?
- 18 What is that ?
- 19 Julia : I don't know how to describe it.
- 20 Holly : Well, show me.
- 21 Not on me.
- 22 Hey, how about on him ?
- 23 You don't mind, do you ?

- 24 Come on.
 25 Just hold still.
 26 Julia, go ahead.
 27 (ポーズ) Come on!
 28 We're all adults here.
 29 (ポーズ) I'm gonna have to see it
 for making an educated decision.
 30 Julia: Well, if it's for educational purposes...

参考文献

- Coulthard, M. *Advances in Spoken Discourse Analysis*. London: Routledge, 1992.
- Francis, G. and Susan Hunston. "Analysing everyday conversation." *Advances in Spoken Discourse Analysis*. Ed. Malcolm Coulthard. London: Routledge, 1992. 123-161.
- 深田博巳 『インターパーソナル・コミュニケーションー対人コミュニケーションの心理学ー』 北大路書房, 1998 年。
- 橋元良明 『コミュニケーション学への招待』 大修館書店, 1997 年。
- 井田良 『基礎から学ぶ刑事法〔第2版〕』 有斐閣, 2002 年。
- 國府方麗夏 「談話分析の単位としての〔アクト〕」 『言語と文化論集』第8号, 神奈川大学大学院外国語学研究科, 2001 年, 99-117 頁。
- . 「箱選びの場面におけるポーシアの言葉についてー聞き手依存型のコミュニケーション方略」 『人文研究』No.148, 神奈川大学人文学会, 2003 年, 59-91 頁。
- McCarthy, M. *Discourse Analysis for Language Teacher*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- 中田智子 「発話の特徴記述についてー単位としての move と分析の観点ー」『日本語学』第9巻11号, 明治書院, 1990 年, 112 - 118 頁。
- Owen, M. *Apologies and Remedial Interchanges: A Study of Language Use in Social Interaction*. Berlin: Mouton Publishers. 1983.
- . "Language as a Spoken Medium: Conversation and Interaction." In *An Encyclopedia of Language*. Ed. N. E. Collinge. London: Routledge, 1990. 244-280.
- Sacks, H. and E. A. Schegloff, G. Jefferson. "A simplest systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation." *Language* Volume50-4 (1974): 696-735.
- Sinclair, J. and Malcolm Coulthard. *Towards an Analysis of Discourse: The*

- English used by teachers and pupils*. Oxford: Oxford UP, 1975.
- . “Toward an analysis of discourse.” In *Advances in Spoken Discourse Analysis*. Ed. Malcolm Coulthard. London: Routledge, 1992. 1-34.
- Tsui, A. B. M. “Interpreting Multi-act Moves in Spoken Discourse.” *Text and Technology: In Honor of John Sinclair*. Eds. B. Mona, F. Gill and T. B. Elena. Philadelphia: Benjamins, 1993. 75-94.
- . *English Conversation*. Oxford: Oxford UP, 1994.

注

- 1 分析には DVD を用いた。タイトルは『ウェディング・シンガー』（東宝, 2000 年）である。(TDV2573D) 原作は *The Wedding Singer*. (Dir. Frank Coraci. Gaga-Humanix, 1998.) である。
- 2 Francis and Hunston (1992) 123 頁を参照せよ。
- 3 ここでは発話とアタランスを別個のものとして扱っている。なぜならば、発話にはアタランス意外にも、ムーヴやアクト等の階級 (rank) が存在するため、これを区別しないと余計な混乱を招くためである。したがって、発話とアタランスは概念上、別個のものである。
- 4 國府方 (2003) 62 頁を参照せよ。
- 5 詳細については Sinclair and Coulthard (1992) を参照せよ。
- 6 詳細は添付資料 (スクリプト) を参照せよ。
- 7 主に法律の分野で用いられる専門用語。詳細は井田良 (『基礎から学ぶ刑事法 [第 2 版]』 有斐閣, 2002 年) 79 頁を参照せよ。
- 8 主に法律の分野で用いられる専門用語。井田 (2002) 79 頁を参照せよ。
- 9 この数字は添付資料 (スクリプト) の台詞左端の数字と対応させたものである。